

# 自治会・町内会について考える

田村 翔平 専任講師

(メカニズムデザイン理論)

私たちが普段、意識することはあまり多くないものの、私たちの暮らしを確実に支えているのが自治会や町内会と呼ばれる地域のコミュニティ（以降、自治会と呼ぶ）である。自治会が行っていることは、地域によって違いや差はあるものの、概ね地域住民の福祉向上に資する活動や取り組みの実施であり、具体的には、ごみ置き場の管理を含む美化活動や祭りの企画運営といった多くの人にとって身近なものから、高齢者の見守りや育児支援などの活動、さらには災害発生時の安否確認や避難所の運営といった重大なものまで、住民が地域で安心して暮らせるための様々な活動を行っている。様々な要因により財政が逼迫する現代の日本において、地域課題の解決を全て公助に委ねることは難しく、自治会のような共助コミュニティが存在し機能することは持続可能な地域社会の発展において重要性が高いことが分かる。

そのような自治会であるが、近年は多くの地域において縮小の傾向が見られる。内閣府が600市区町村を対象に実施したアンケート調査によると、令和2年における自治会等への加入率の平均は71.7%となっており、およそ10世帯に3世帯が自

治会等に加入していないことが分かる。地域活動への参加が難しくなっている要因は様々であると考えられるが、大きな要因として、ライフスタイルの変化に伴い地域活動に充てる時間が確保できなくなっていることや、そもそも活動自体に魅力を感じていない人が増えていることなどが挙げられている。

今回、筆者が経済学者として注目するのは、各人が地域活動にどの程度の時間を充てることができるのかや、活動に対してどの程度の魅力を感じているのかといった情報は本人にしか分からない私的情報であるという点である。この場合、より自分が得や楽をするために、自分の情報を偽って伝え、他人の努力や善意にただ乗りしようとする機会が多々生じる。これにより、例えば本来であれば全体として行われることが望ましい活動が、情報や意思の集約が上手いできない結果、行われなくなってしまう可能性がある。ただ乗りによる不公平感をなくし、真に必要とされる活動を行うことの重要性は自治会活動においても例外でないと考えられる。

筆者が専門とするメカニズムデザイン理論では、私的情報に起因する問題の解決に有用な仕組みとしてク

ラークIIグロブスメカニズムというものが考案されている。ざっくり説明すると、この仕組みのもとでは、自分の意思が平均的な他者の意思を覆す程の強さを持つとき、自分の意思が反映される代わりにより多くの負担を負うというものである。この工夫により、自分の意思を偽って伝えても得をしない状態が生まれ、ただ乗りの問題を解決できることが期待できる。自治会においても、例えば祭りなどの行事を継続するかどうかや、電子回覧板を導入するかしないかといったように様々な意思決定の場面があるが、条件が揃えばこの仕組みを活用できるかもしれない。自治会を取り巻く課題は様々であるが、今回紹介した仕組みを始め、様々な試みが各地で取り入れられ、持続可能な地域社会を支えるコミュニティが存続し、人々が地域で安心して暮らせる社会になることを願う。